

令和元年5月21日現在

機関番号：43601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02373

研究課題名(和文)現代によみがえるエマソン

研究課題名(英文)Emerson reviving in the present age

研究代表者

高梨 良夫 (Takanashi, Yoshio)

長野県短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：50163225

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者高梨良夫は、エマソンの思想と鈴木大拙を中心とした禅仏教、大乘仏教の教義及びキリスト教神秘主義思想との比較考察を通じて、グローバル・環太平洋的な視点から、エマソンの思想の現代性を考察した。研究分担者堀内正規は、現代思想の視点から前期エマソンの21世紀における意義をトータルに考察し、単著の刊行などを通じて新たなエマソンの捉え方を打ち出した。同時に日米の現代詩を牽引する吉増剛造とフォレスト・ガンダーとの交流を通じて環太平洋的な往還によってエマソンの新たな読み方を共著の形で纏めて世に問うた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高梨はグローバルな視点からエマソンの思想と禅仏教・大乘仏教及びキリスト教神秘主義思想との比較考察を試み、また堀内は、エマソン研究の単著により日本のアメリカ文学研究の世界でエマソンの捉え方を塗り替えることに貢献し、日米の最前線で活躍する二人の詩人とのコラボレーションにより、環太平洋的なエマソンの読み直しを書物の形であらわした。以上のダイナミックなエマソンの実像を探究し、従来の一面的なエマソン像に修正を迫った研究成果は、エマソンの思想・文学の現代性を学会・社会に提示した点に学術的・社会的な意義が認められると考える。

研究成果の概要(英文)：Yoshio Takanashi, research representative, making comparative investigations on Emerson's thought and Zen, Mahayana Buddhism, and Christian mysticism, has given consideration to the modern aspects of Emerson's thought from global and transpacific viewpoints. Masaki Horiuchi, research partaker, has examined the total significances of the early Emerson in the 21st century from the standpoint of contemporary philosophy and, mainly through the publication of a book-length study, presented new approaches to Emerson studies. At the same time, through the collaboration with two poets who are top runners in the contemporary poetry in Japan and the United States, Gozo Yoshimasu and Forrest Gander, published a transpacific book on Emerson, proposing new ways of reading Emerson.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：エマソン 鈴木大拙 アメリカ超越主義 禅仏教 現代思想 環太平洋 日米現代詩 コモン

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初は、エマソンが日本において最も愛読された欧米の詩人・思想家の一人であったという明治・大正時代の「エマソン現象」は、信じる事が出来ない程の歴史的事実になっていた。米国では1970年代中葉頃から、また没後100年(1982年) 生誕200年(2003年)を契機に、エマソンの再評価が推進され、優れた研究が精力的に試みられてきており、またグローバルな視点からエマソンの思想の形成・受容・影響の実相が解明されつつあった。研究代表者高梨と研究分担者堀内は、我が国においては、エマソンの理解がステレオタイプ化されている傾向がみられ、複雑で多面的な思想・文学の全体像が十分に理解されていないのが実状で、エマソンの思想・文学の持つ重要性和現代的意義を明確にすることを通じて、我が国においてもエマソンの再評価を促す試みが必要という認識で一致し、本研究を企画・推進することになった。

2. 研究の目的

本研究は、エマソンの思想・文学の現代性に焦点を当てながら、従来のエマソン像の修正を試み、エマソンの思想・文学が、21世紀に生きる現代人にとっていかなる意義を持っているのかを明確にし、日本人の研究者の視点から、エマソンの再評価を試みることを目的としている。

3. 研究の方法

高梨、堀内は、エマソンの文学・思想の持つ現代性を明確にするという研究の目的について共通の認識を持ちながら、同一のテーマを共同で探究するという研究方法ではなく、それぞれの独自の視点から本研究を推進した。以下に両者の研究方法について具体的に記す。

(1) 高梨の研究手法

第一の研究のテーマは、エマソンの超越主義思想と禅仏教及び大乘仏教の比較考察を通じて、環太平洋的、グローバルな視点から、エマソンの思想の形成、受容、影響関係を明確にすることを通じて、エマソンの思想・文学の現代性を明確にすることである。そのため次のことを実施した。

本テーマに関係する記述が認められるエマソンの日記、エッセイ、講演、書簡、『ダイアル誌』、また Van M. Ames, *Zen and American Thought*, John G. Rudy, *Emerson and Zen-Buddhism* などのアメリカ人研究者による研究書を精読し、エマソンの思想形成に対するヒンドゥー教の影響、禅仏教、大乘仏教の教義との類似点、相違点について考察した。

『禅と日本文化』、『鈴木大拙全集』などの鈴木大拙の日本語・英語の著作、『臨済録』、『法華経』、『大乘起信論』などの禅仏教、大乘仏教関係の日本語・英語の仏典、著作、研究書を精読し、エマソンの思想との類似点、相違点について比較考察を試みた。本テーマの研究成果による論文を日本語・英語で執筆し、学術誌、大学紀要、共著などに掲載した。

本テーマの研究成果について日本及びアメリカの学会で口頭発表を行った。

米国のエマソン学会に出席し(2016年)、アメリカのエマソン研究者と意見交換を行い、また日本英文学会、日本アメリカ分学会、日本ソロー学会などに出席し、アメリカ・ロマン主義文学研究者などと意見交換を行った。

ハーヴァード大学ワイドナー、イェンチェン図書館(2015年)、東京大学附属図書館・駒場図書館、東洋大学附属図書館などで、また図書館間貸借制度を利用して、本テーマに関する研究資料を取集した。

第二の研究のテーマは、エマソンの思想をキリスト教神秘主義思想のなかに位置づけることを通じて、エマソンの思想・文学の現代性を明確にすることであり、次のことを実施した。

エマソンとヤコブ・ベーメの思想との間の比較考察に関する論文を執筆した。

ドイツ・ハイデルベルグ大学で開催された国際学会“Transcendentalist Intersections: Literature, Philosophy, Religion”に出席し、本テーマを中心にアメリカ及び各国のエマソン研究者と意見交換をし、またドイツの大学図書館で研究資料を取集した。(2018年)

研究期間全体を通じて毎月東京で開催されたキリスト教神秘主義思想研究会に出席し、イギリス、ドイツ、フランス文学・思想・宗教研究者などと意見交換を行った。

(2) 堀内の研究方法

初期エマソンを対象とし、現代思想的な視点から、エマソンの現代的な意義を浮き彫りにした。

エマソンの主体の問題を、身体論的な視点を導入して捉え直した。

徹底的なテキストの精読の方法をとった。

エマソンの自己(self)と世界との交わりを、現代日本の文化人類学者・岩田慶治や

井筒俊彦らとの比較から検討した。
伝記的な視点から、エマソンの日記を読み直し、最初の妻エレンや長男ウォルドーとの死別や、超絶主義者たちとの交流の在り方を検討して、エマソンの自己の在り方を考察した。
ハンナ・アーレントの思想との比較から、エマソンの「キャラクター」概念の現代性を掴み取った。
現代詩人・吉増剛造との交流を通じて、アカデミズムの枠を越えたエマソンの捉え方を模索した。
現代アメリカの詩人・フォレスト・ガンダーとの交流を通じて、アカデミズムの枠を越えたエマソンの捉え方を追求した。
本テーマの研究成果による論文を日本語・英語で執筆し、単著・共著の著書を出した。

4. 研究成果

(1) 高梨の研究成果

エマソンの超越主義思想と禅仏教及び大乘仏教との比較考察を試みた研究成果としては、まず共著 *Thoreau in the 21st Century: Perspectives from Japan* (2017) に掲載した “Ralph Waldo Emerson and Daisetsu Suzuki: A Comparative Investigation on their Views of Nature, Mind, and Language” を挙げる事が出来る。この論文においては、鈴木が青年時代にエマソンのエッセイ集を熱心に読んで上で執筆した論考「エマソンの禅学論」に注目し、鈴木が自らの禅思想とエマソンの超越主義思想に類似性を見出した理由について考察した。そして鈴木は、インドを中心に形成された「空」を中核的教義とする大乘仏教とは異なり、「空」を「無」を介して理解した老荘思想と融合した中国仏教との共通性を持つことを指摘し、エマソンの思想との間には顕著な類似性が認められる一方で、両思想の根幹における本質的相違も明確にした。この論文の内容を発展させ、鈴木最晩年のエッセイを収録した『東洋的な見方』に注目した論文は、「エマソンと鈴木大拙 『東洋的な見方』を中心とする比較考察」である。また *Oxford Research Encyclopedia of Literature* (Oxford UP, Web, 2017) に掲載した “The Reception of Ralph Waldo Emerson and Henry David Thoreau in Meiji to Taisho Japan” においても、鈴木のエマソン受容について論じた。

またエマソンの思想と禅仏教の教義との比較考察を試みた論文「エマソンと禅仏教『臨濟録』を中心とする比較考察」においては、エマソンの Self-reliance と禅仏教の「直指人心」, 「見性成佛」, common, familiar, low なるものななかへの真理探究と「平常心是道」, Reason, understanding, correspondence を基盤にした言語観と「不立文字」, 「教外別伝」などの両者の根幹的思想・教義をめぐっての、類似点、相違点に関する比較考察を試みた。

さらにエマソンの思想と大乘仏教との比較考察を試みた研究成果として、「エマソンの内なる神」と仏教の「如来蔵」と米国の学術誌 *The Journal of East-West Thought* に掲載した “Emerson’s ‘God-within’ and the Buddhist ‘Buddha-womb’” がある。両論文においては、*The Dial* の “The Preaching of Buddha”、『法華経』、『大乘起信論』などを参照しながら、エマソンの “God-within” と大乘仏教の「如来蔵」, 「仏性」との間の類似性について考察し、「如来蔵」・「仏性」を実在的・とみなす理解においては、両者の間に顕著な類似性が認められるとする結論を導いた。

エマソンの思想をキリスト教神秘主義思想のなかに位置づける試みの研究成果としては、「エマソンとヤコブ・ベーメ 思想の類似性をめぐって」がある。この論文においては、エマソンの『日記』を参照しながら、ドイツの神秘思想家・自然哲学者ヤコブ・ベーメの思想のエマソンへの直接的影響を指摘し、自然、神、言葉、教会制度・教義に対する疑念、神秘的体験などをめぐる両者の思想の類似点だけでなく、善悪観、イエス・キリスト理解などをめぐる相違点に関する比較考察を試みた。

(2) 堀内の研究成果

初期エマソンを現代思想的な視点からトータルに捉え、「身体」, 「力」, 「普遍」をキー・ワードにしてパースペクティブを提示した。それが日本語論文「自己の美学と身体・力・普遍 前期エマソンの思想」, 及びそれを元に書き直した英語論文 “Uses of the Early Emerson in the Present Age” (編著 *Thoreau in the 21st Century: Perspectives from Japan* 所収) に結実している。

自身のエマソン研究の成果を一貫した構成に基づいて再編し、単著『エマソン 自己から世界へ』を刊行した。そこではエマソンの思想的な可能性として、一方で、主体が自我の固着を瞬間的に解除されるような体験を、従来の神秘主義的な枠組みではなく身体論的な視点で捉えて「自己の開かれ」として重視し、現代日本の岩田慶治らと比較している。他方で、他者との関わりにおいてエマソンの主体がいかに関わりや恥の感覚を持ち、自我の弱さを抱えていたか、それ故にこそいかに謙虚に他者を遇し得たか、またそれがいかに現代において望ましい主体のふるまいであるかを、最愛の者

たちとの死別の問題や友情の問題を通して考察した。その結果として、初期エマソンが「自己」の問題から出発して「世界へ」の経路をいかに創り出したかについて新たな示唆をおこした。また、その延長線上の問題として、「エマソンにおける幸福の二つの意味——ハンナ・アーレントからエマソンを見る」(共著論文)において、エマソンの「キャラクター」概念の現代性・可能性を提起した。いずれにおいても、いわゆるつまみ食いの読み方や歴史(研究)的な状況論、また徒に先行研究の解釈を前提にして直にエマソンのテキストと向き合わないような読み方を排し、難解とされるエマソンの散文テキストを徹底的に精読した。

これらと並行して、1960年代初頭から現在にいたるまで、常に日本の現代詩のトップを走り続けている詩人・吉増剛造について考究し、比較文学的な視点から「あたらしいエマソン——吉増剛造からエマソンへ」を著し、書籍『裸の common を横切って』に収録した。『透谷ノート』の著作もある吉増は、透谷の視点と合わせてエマソンについて考究してきたし、青年期から19世紀アメリカ文学を自己形成の深い部分で血肉化するようにして持続的に読み続けてきた。そうした吉増から深く学ぶことによって、19世紀アメリカ文学研究者がアカデミズムの内部のみで思考するのではなく、「いま・ここ」で働いている文学の力としてのエマソンを考える契機を受けとめることができた。

2018年度のピューリッツァ賞(詩部門)を受賞した現代アメリカの詩人・フォレスト・ガンダーに、エマソンのテキストから触発された詩を執筆してもらった。そのための準備の意味合いから2016年1月末から2月にかけて、ボストンに滞在し、プロヴィデンスにてガンダーと会ってコミュニケーションをとった。吉増にも新たにエマソンに関するテキストの執筆を依頼し、「『日記(エマソン)』を読む」と題されたテキストを書いてもらった。二人に執筆してもらったテキストを元にして、両詩人がいまエマソンから何をどう受けとめているか、そこから現代の研究者は何を読みとることができるかに関して、書き下ろしの文章を執筆し、書籍『裸の common を横切って』を刊行した。多年にわたる堀内と両詩人との個人的な交流の産物として、いかにアカデミズムの枠を越えて専門研究の成果を世に問うかの模索の、一つの結果でもある。現役の創作者とのコラボレーションという方法によって研究課題にこたえたいという当初の目論見が結実したものと考えている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文等](計15件)

Takanashi, Yoshio “Emerson’s ‘God-within’ and the Buddhist ‘Buddha-womb.’” *The Journal of East-West Thought*, vol. 9, no. 1 (Mar. 2019): pp. 1-14. (査読有)

高梨良夫「エマソンとヤコブ・ベーム——思想の類似性をめぐって」『長野県短期大学紀要』第73号、33-43頁。2019年3月(査読無)

高梨良夫「エマソンとソロー——自然観をめぐって」『ヘンリー・ソロー研究論集』第44号、25-35頁。2018年9月(査読有)

高梨良夫(書評)堀内正規著『エマソン——自己から世界へ』『ヘンリー・ソロー研究論集』第44号、112-115頁。2018年9月(査読有)

Takanashi, Yoshio (Review) Shoji Goto, *Emerson’s Eastern Education, Emerson Society Papers*, vol. 28, no. 1 (Spring 2018): p. 8. (査読有)

高梨良夫「エマソンの内なる神と仏教の如来蔵」『長野県短期大学紀要』第72号、45-55頁。2018年3月(査読無)

Takanashi, Yoshio “The Reception of Ralph Waldo Emerson and Henry David Thoreau in Meiji to Taisho Japan” *Oxford Research Encyclopedia of Literature* Oxford University Press (Mar. 2017). Web. (査読有)

堀内正規「あたらしいエマソン——吉増剛造からエマソンへ」『比較文学年誌』(早稲田大学比較文学研究室)第53号(2017年3月)30-47頁。2017年3月(査読無)

Takanashi, Yoshio (Abstract) “Emerson and Daisetz Suzuki” *Emerson Society Papers*, vol. 27, no. 2 (Fall, 2016): p. 11. (査読有)

高梨良夫(書評)ラルフ・ウォルドー・エマソン著、小田敦子・武田雅子・野田明・藤田佳子訳『エマソン詩選』『図書新聞』2016年9月(査読無)

高梨良夫「エマソンと禅仏教——『臨濟録』を中心とする比較的考察」『長野県短期大学紀要』第71号、47-56頁。2016年7月(査読無)

堀内正規「罇と鎮魂——『裸のメモ』を読むために」『現代詩手帖』2016年7月号「特集・吉増剛造、未知の表現へ」100-104頁。2016年6月(査読無)

高梨良夫「エマソンと鈴木大拙——『東洋的な見方』を中心とする比較的考察」『長野県短期大学紀要』第70号、79-90頁。2016年3月(査読無)

堀内正規「自己の美学と身体・力・普遍——前期エマソンの思想」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第61輯第2分冊5-19頁。2016年3月(査読有)

高梨良夫(書評)和田守編著『日米における政教分離と良心の自由』『ヘンリー・ソロー研究論集』第41号、72-74頁。2015年9月(査読有)

〔学会発表〕(計4件)

- 堀内正規「エマソンの善意と弱点 エッセイ“Compensation”を読む」アメリカ文学
会東京支部 東京(慶應義塾大学三田キャンパス)2018年5月
高梨良夫「エマソンとソロー 自然観をめぐって」日本ソロー学会全国大会 鹿児島
2017年10月
高梨良夫(招待講演)「エマソン、東洋、日本」中央大学英米文学会(中央大学)東京
2016年12月
Takanashi, Yoshio “Emerson and Daisetz Suzuki” American Literary Association
(ALA) 27th Annual Conference: San Francisco, CA., May 2016.

〔図書〕(計4件)

- 堀内正規『裸の common を横切って エマソンへの日米の詩人の応答』(吉増剛造、
フォレスト・ガンダーとの共著)小鳥遊書房 全174頁(内堀内執筆分119頁)2019
年3月
堀内正規「エマソンにおける 幸福 の二つの意味 ハンナ・アーレントからエマソ
ンを見る」『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』貴志雅之編 金星堂 252 -
270頁 2018年2月(査読有)
Thoreau in the 21st Century: Perspectives from Japan. Ed. Masaki Horiuchi,
Kinseido, Oct. 2017 (日本ソロー学会員19名による共著、全283頁): Takanashi, Yoshio
“Ralph Waldo Emerson and Daisetsu Suzuki: A Comparative Investigation on their
Views of Nature, Mind, and Language,” pp. 246-260; Horiuchi, Masaki “Uses of the
Early Emerson in the Present Age,” pp. 261-274 (査読有)
堀内正規『エマソン 自己から世界へ』(単著)南雲堂 全302頁 2017年10月

6. 研究組織

- (1) 研究代表者: 高梨良夫 (TAKANASHI, Yoshio)
長野県短期大学・その他部局等・教授
研究者番号: 50163225
(2) 研究分担者: 堀内正規 (HORIUCHI, Masaki)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 00219213
(3) 研究協力者: 吉増剛造 (YOSHIMASU, Gozo) 詩人
Forrest Gander 詩人(アメリカ)